全国調査による高齢者向け生きがい感スケール作成と定義

○近藤 勉¹・鎌田 次郎²・尾崎 勝彦^{3*}

(¹神戸医療福祉大学・²関西福祉科学大学・³フリーランス)

キーワード：全国調査，生きがい感スケール，操作的定義

Development of the new scale of feeling of worth living for the aged and the definition.

Tsutomu KONDO¹, Jiro KAMADA² and Katsuhiko Osaki^{3,*}

(¹Kobe Health Welfare University, ²Kansai University of Welfare Sciences, ³Freelance)

Key Words: nationwide survey, feeling of worth living for the aged, operational definition

目 的

高齢者の生きがい感を測定する尺度はK-1式(近藤・鎌田2003)として作成されたが、調査内容や調査対象が不十分との考えから改めて先行研究を精査し、調査対象者を全国に求め新しい尺度を作成、操作的定義を求めた。

方 法

CiNiiのデータベースを使い文献を15年にまで遡って47の生きがい概念を抽出し、K-J法(川喜多1967, 1970)を用いて高齢心理学研究者5名で17概念に整理統合し、全国を11区に分け各選挙管理委員会が所管する名簿から無作為に筆写した65歳以上の一般在宅高齢者(N=1309, 有効回答322名)に生きがい感に入るか否かの郵送法による調査を3件法により実施、入る回答が多かった12概念を残した。さらに採択された概念からを上記研究者によって作成された具体的な設問項目45項目を再度全国調査により実施した(N=968, 有効回答228名)。結果の反応分布については天井・床効果を考慮し、80%以上20%以下の項目を除去し14項目が選定された。この14項目で再度全国調査(N=1309, 有効回答292名)し、妥当性と信頼性を検討した。プロマックス回転による探索的因子分析の結果、2項目は因子負荷量が低かったため除外した。再度の因子分析により3因子を確定し、確認的因子分析により最終モデルとした。その後、再調査信頼性、基準関連妥当性、概念的妥当性を確認した。

結 果

3因子は、「私がいなければ駄目だと思うことがある」「私がいらないとは思わない」「自分にしかできないと思うことがある」「これだけは人に任せられないと思うことがある」「『自己心』」「自分が向上した、何か成し遂げたと思えることがある」「他人から認められ評価されたと思えることがある」「今の生活にはりあいを感じている」「なにごとに対しても積極的である」「『充実感』」「自分の可能性を追求したいと思っている」「私にはまだやりたいことがある」「私には達成したいことや見届けたいものがある」を『達成意欲』と名づけた。この3因子で全体の46.7%が説明可能であるとわかった。確認的因子分析ではプロマックス法により母数を推定、得られた標準化係数は全て0.1水準で有意であった。モデルの適合度はいずれも高く、この3因子11項目をもって最終モデルとした。

再調査(N=292, 有効回答115名)による信頼性係数では11項目合計点では0.91と高い推定値が得られた。クロンバークのアルファ係数では全体で0.83と言う高い数値が得られた。基準関連妥当性の外部基準値ではセルフ・アンカリング・ストライビングスケール(以下、セルフスケールと称する; Cantril, H. 1965)による値を採用したが0.73と言う相関係数が得られた。概念的妥当性の検証では明らかに生きがい

感が高いであろうと考えられる集団との差の検定(渡部1993)のため、高齢者を対象とした学習講座の受講生を全国11区に無作為で求め、職員、講師に依頼し集合調査法を実施した(N=385, 有効回答385名)。その結果、各因子、合計得点とも高い水準で有意差が見出された。

上記の研究を踏まえた高齢者の生きがい感の操作的定義としては「毎日の生活の中で自分がいなければと言う自負、自分は向上してきたと言う充実感、これから何かを達成したいと言う意欲を持って生きていくはりあい意識」であると言える。

考 察

項目内容が測定したい概念を反映しているかどうかを専門家が判断するなどの方法で検討するものを内容的妥当性と言うと小塩(2011)は述べている。筆者達は高齢者心理学者5名で47の概念を17項目に整理分類している。さらにこれらの項目が生きがい感に入るかどうかの全国調査を実施するにあたって、具体的な項目作りに改めて協議選定をおこなっている。また生きがい感に入るとされた12の概念を適切に表現していると思える項目を過去の文献から抽出、創案して5名でもって取捨選択した上で全国調査をおこなっている。これらの手続きは内容的妥当性を確保するに十分な手続きであった。また探索的因子分析を14項目に対しておこなった結果、3因子11項目に選別された。確認的因子分析でも妥当であることが認められた。さらに全国の講座学習者を対照群として検証した結果、いずれの因子も全国の一般高齢者より高い結果が得られた。セルフスケール得点を外部基準値とした相関係数も併存的妥当性を示す値であった。再調査をおこなった結果は高い信頼性数値が得られ、全体のアルファ係数も高い値を示した。上記の結果、11項目よりなる新しいスケールは信頼性、妥当性ともに高いスケールと言える。今回のスケール作成は科学的手法に基づいており、結果として逆転項目もなく、項目数も少ないため高齢者にとっては負担の少ない、実施する側からは扱いやすいスケールと思われる、今後活用が大いに期待されよう。

引用文献

- Cantril, H. (1965) The pattern of human concerns, 22-23. Rutgers U. P., New Brunswick, N. J.
- 近藤 勉・鎌田次郎(2003) 高齢者向け生きがい感スケール(K-1式)の作成および生きがい感の定義. 社会福祉学, 43(2):93-101.
- 川喜多二郎(1967) 発想法. 第54版, 65-81, 中公新書.
- 川喜多二郎(1970) 続発想法. 第37版, 49-62, 中公新書.
- 小塩真司(2003) 質問紙の基礎知識. 小塩真司・西口利文(編) エイジングの社会心理学, 110, 北樹出版.
- 渡部 洋(1993) 心理検査法入門, 62, 福村出版.